

---

# トオリモノ

荒野 蛮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トオリモノ

### 【Nコード】

N4020M

### 【作者名】

荒野 蛮

### 【あらすじ】

主人公ユエとユエが作り出した架空の人物ミスター・クロックマンの空想と現実の間のお話。ユエが望む幸せな世界に辿り着けるのだろうか……。

一章 ミスター・クロックマンの幻想（前書き）

この物語は、フィクションDEATH（ ）（ ）ノシ（

## 一章 ミスター・クロツクマンの幻想

人は、一つの世界に共存しながらまったく別の世界に生きている。

「トオリモノ」

一章 ミスター・クロツクマンの幻想

「幸せって、なんなんだろうな……。」

足元で団子になっていいる毛布を蹴り飛ばして、寝返りをうつ。枕カバーから、ほのかな汗のにおいがする。頭上のクーラーは加減を知らず、部屋はもはや寒すぎるくらい冷えていた。

「幸せって、なんなんだよ……。」

虚空に消える自らの問いに、答える者は無く。ただ、小さな水槽のモーター音に混じって、水の流れる音が聞こえてくるだけだった。  
「……、母さん。」

けして、このユエという男がマザコンだったわけではない。マザコンではないものの、お母さんっ子であったことは否定しがたい事実である。ユエの父親には職が無く、変わりに母親が身体を張ってユエを育ててきた。そんな母親の姿を見て育ったユエは、いつか母親を幸せにしたいと心に誓って、道の果ての田舎から、わざわざ東京なんていう都会にふらりと出てきたのである。

しかし上京して2年目の初夏。ユエの母親は自殺した。

あの時の言い知れない恐怖は、きつと死ぬまで忘れないうつ。

サークルの帰りにケータイで知らされ、その足で新幹線に乗り込み、乗り物酔いしながらも、ふらふらと帰宅した。その家で俺を出迎えたのは普段めつたに顔を合わせない親戚のおばさんで。

玄関口までその異様なにおいは漂ってきた。この家においては、ない。菊とゆり、それとお線香のにおい。2階にあがると、おばあちゃんが来ていた。棒立ちしてその光景を眺める俺は、おばちゃんに手を引かれて、上着を着たまま座敷に通された。

開け放たれたそのふすまの向こうに、白い布を顔にかけて横たわる、母さんがいるんだ。

なんだよ、この異常事態は……。

おばあちゃんに強制的にその白い布を剥ぎ取られて。俺は問答無用にその顔を見せ付けられた。

若干鬱血して紫がかった、生気のない母さんの顔。微笑んでいるようなその顔に、ぞつとした反面で、うつとりと見とれてしまった。ああ、いつもの母さんだ……。って。けれど、その頬は氷のように、冷たくて。浴衣の衿から、くつきりヒモの痕が見えた。

俺は、涙を止められなかった。

酷く、酷く怖かった。

アレから、もう一ヶ月半は経過した。49日は実家に帰らなかった。

人は、死んだ後49日はこの世。あるいはその家に居るのだという。いわゆる、あの世で成仏するための試練があつて。それが終わるのが、その49日なんだとか。

はたしてそれが事実なのかはわからない。けれど、俺にはわかるんだ。母さんは、まだ、ここに居る……。そんな気がする。

工は葬儀が終わってしばらく実家に居たが。10日ほどでまた東京に帰ってきた。それから今の今まで、学校に行くわけでもなけ

ればバイトをするわけでもなく、部屋に引きこもっていたのだった。

「何、したいんだろうな。俺……。」

夢は、もう叶わない。幸せにしたかったその人は、もう居なくなっってしまった。

まるで、この世界のものがすべて脱色されてしまったかのように。それらにまったく興味関心を示せなくなっていった。今になって解る。俺は今まで、自分自身の存在意義を母さん所以のものにしてきたんだ。ただひたすら、母さんの誇りになりたかった。

そんなことよりもまず先に、最愛の母親の自殺という異常事態をどうやって納得すればいいのか。それをなんとかしない限り、先へは一歩たりとも進めるような気がしないのだが。無論納得などしようがなかった。

今のところ有力なのは、「母さんは自分を愛してくれていた。俺が大人に成ったから、信頼してくれたから、もういいと思って……。」

5

「じゃあ、どうして待っててくれなかったんだ!!」

そんなもの、ただの幻想だ。俺を慰めるための、甘い幻想に過ぎないんだ……。

不意に声を上げたユエの目じりを、涙が伝う。耳のふちをそって、赤茶けた髪の毛に落ち、茶色い布団に黒ずんだ痕を残して消えた。

その夜、幼い俺は母さんに甘えていた。とても、幸せだった。

ジリリと無常に鳴り響く目覚ましの音と共に、ユエは目を覚ました。目覚まし時計がなりつづける中、しばし呆然と虚空を眺めていた。

「今のが、夢……。コレは、現実？コレが……。現実……。」  
こぞつぱりとしたさびしい部屋は、朝も夜も変わらない。薄暗いその空間に、小さい水槽が一つ。モーター音に混ざって、水の流れる音。それと、ユエのすすり泣く声がひとつ。

気がつくと、夜だった。

俺はまた、ぼんやりと母さんのことを思っていた。

「お前の世界だ。どう会釈するも、お前次第なんだぞ。」

不意に、声があった。俺は驚いてはいたが、自分でも恐ろしいほど冷静だった。ただ、激しく鼓動する自分の心臓の音が、耳元に聞こえていた。

「だ……。だれだッ!!」

思い切って、身を起こして部屋を見渡す。

窓ガラス越しに、クモが一匹。水槽はいつものように稼働していて、小さな虫がライトの周りを飛んでいる。押入れの戸が開いたが、その向こうにはひたすら闇があるばかり。

「いやだなあ。知っているくせに……。」

その声はすぐ背後から聞こえてきた。

振り返ると、黒い布を全身にまとった人物が、俺の隣に座っていたのだった。

「そんなに驚かなくなたっていいじゃないか？俺たちは友達なんだから。そうだろう？ユエ。」

コイツと友達であった事など一度も無い。だが、知らない人物であるとは、言い切れなかった。

「クロツクマン……。なのか？」

「失敬な。ミスター・クロックマン。だ。」

ミスター・クロックマン。彼は、俺が作った架空の人物。僕が現実を見る傍らで、彼は魔法を現実のものにできる力を持っている。

「ユエ。そんなに辛い現実を見たいのか？」

「……。」

ミスター・クロックマンは、いわばもう一人の俺といつてもいいだろう。俺の考えていることは、まるきりお見通しで。それに関していつも指図してくる。こうして具現化したことはさすがに無かったが。

「お前の母親は、お前を愛してくれていた。それではいけないのか？お前が一人前になったから。それまで耐えた。もういいだろうと。そして死んだのなら……。きつと今もおまえについていてくれる。この先、色んな災害から守ってくれるだろう。お前の母親が、お前を殺したりなどするものか……。」

ミスター・クロックマンは、すらすらと俺が俺を諫めようと心に描いていたそれを読み上げた。

「これでは、ダメなのか？あの顔を見ただろう？」

「あの」

やすらかな、

「笑顔を。」

だって、

「だって……。」

解っている。ミスター・クロックマンは、俺を守る存在。苦いコーヒーに砂糖を入れてくれる。そして、コレがコーヒーだと、そう認知させてくれる。そんな存在なんだ。

だから、

「アレは……、アレは……、」

「よせ。」

「病院で、加工された顔なんじゃ」

「お前が俺を否定したら、」



「本当は・・・、」

「それがお前の現実に」

「首吊り自殺って・・・。」

脳内に一瞬。カメラのフラッシュのような。けれど、どんな現実よりも鮮明な。体験したことの無い現実の、空想のかけらが・・・。

その瞬間、ユエは酷いものを見た。ユエは未加工の自殺現場をまざまざと想像して現実にしてしまったのだ。ユエの瞳から、また大粒の涙があふれ、目の前の惨劇を言葉の羅列にしたような、そんなものが口からとめどなくあふれてきた。

「もう、忘れるのだ」

そう言いながら、ミスター・クロックマンは俺に優しい思い出の場面をいくつも見せてくれた。

「言っていることとやっていることが違うじゃないか」

「俺も、お前の母親の子供なんだ・・・。」

忘れなくては、この苦しみから解放されることは無いだろう。だが、苦しくても忘れることを許さない俺が居た。ずっと、ずっと泣いていた。俺は、まだ母さんの子供。まだ、甘えていたいよ・・・。

「自殺したものは、あの世にはいけない。だから、まだこの世にいることで自分が死んだと気がつかないまま、生きている人の身体に憑依して何度も死のうとする。」

「それを、トオリモノと呼んだりする。」

俺とミスター・クロックマンの中にある、前提にある知識が、不意に心の中によぎった。

「いいよ、それが母さんなら。母さんは、俺を殺したりしない・・・。」

はたして、本当にそうだろうか・・・。

「・・・あれ？クロックマン??」

不意に、俺は消された。変わりに、ユエの疑念が大きく膨れ上がり、現実となってユエの目前に現れたのだ。こうなっては、もうとめられない。

翌朝、先生が暗い顔で教室に入ってきて言った。

「ユエが昨夜、自分の部屋で首を吊っているのが発見された。病院に搬送されたが、すでに・・・。」

ああ、ユエはトオリモノに殺されたのだ。そう思った・・・。

## 二章 色あせた世界

### 二章 色あせた世界

今日も、ユエはとなりに居ない。これから、永遠に、俺の隣から姿を消してしまった。

きつと、この世には神様なんて居ないんだろう。

ヤマノテ線タカダノババ駅で乗り換えて、セイブシンジユクセンの急行でしばらく行くと、カミシヤクジイという駅で各駅に乗り換える。タナシの手前の寂れた小さな駅で、俺は降りる。

そんないつもの帰り道で、はじめてユエの死を実感した。

こんなに、長い道のりだったなんて……。そんなことも、ついでに実感した。

電信柱の上に、カラスが居た。少し離れたところで、すずめが2羽鳴いている。どうやら、それを捕まえようとしているらしく、辛抱強く様子を伺っているようだった。

そんなどうでもいい光景をぼんやり眺めながら。俺は初めて自分の身体の重さを感じた。ほとんど日が暮れた紫色の空も、さえない空気のおいも、風の温度も。全部以前とは違うもののように思えた。

そういえば、虫の知らせもなかったな。あの日は、カラス一匹鳴いていなかった。何気ない日常にぽっかり空いた穴に、うっかり落ちてしまった。それは突如としてやってくる。人の死など、そんなものなのかもしれない。そして、これから俺が生きていくであろう一生の長さを、改めて痛感した。

天国があるなら、それでいい。けれど、ユエがそんなところに行っても、幸せだと思ふ気がしなかった。願わくは、天国も地獄もなければいい。

そんなものは、俺の願望でしかないのかもしれない。せめて、ユエが幸せでありますように。ユエが幸せで居られるのなら、そこが闇の中であろうと俺の中の天国になるのだろう。実際、今どこで何をしながら、どんなことを考え、感じているのだろうか。想像するしかできない死後の世界は、信じたらそれが真実で、それが現実であるかのような世界だった。それは、まるで真っ白な画用紙のようでもある。

ユエ、俺はお前の中で、どんな存在だったんだ？

思わず立ち止まったユエのアパートの一室。もうすっかりかたづけられたようで、すでに次の住人を募集していた。

ピンポンを押したら、今にもユエが出てきそうだ。そんな自分勝手な妄想をして、ため息をついた。

俺が思うユエと、実在したユエとは同一でありまったくの別人である。一匹の猫が居たとして。そいつがタマであり、シロであり、ユキちゃんであり、チビであり、サクラであるように。

その時点で、俺もまたすでにトオリモノに憑かれたのだと感じていた。

俺が作り出してしまった架空のユエが、そのドアから顔を出したのだ。

太陽が無い世界では、向日葵はどんなふうに咲くんだろうな。それは、まるでユエが見ていた世界。

ユエが、俺に共感を求めている。そんな気がしてならなかった。

## 三章 再会

### 三章 再会

なんだろう。とても、安らかだ。ひんやりと、冷たい。けれど、とても懐かしい……。

「ユエちゃん、ユエちゃん……。」「

俺は不意に呼ばれて、目を覚ました。

「……。かあさん?」

そこには、なんと、母さんが居たのだ。

「ユエちゃんツ!」

母さんは、俺をきつく抱きしめてひたすら泣いた。それでも、俺は幸せいっぱい気分だった。嗚呼、やっぱり。母さんは俺にずっとついていてくれたんだ!!

しかし、視界の端にいるミスター・クロックマンを捕らえると、恐ろしい記憶が戻ってきた。

そうだ。俺は、母さんに殺されたのだ……。

母さんを抱き返していた俺の手は、力なく滑り落ちた。

「ごめんね、ごめんね。ユエちゃん!」

恐る恐る振り返ったそこには、俺がぶら下がっていた。

「な……。なんだよ。コレ、なんなんだよ!」

「ごめんね、ごめんね……。」「

俺は、母さんに泣きつかれながら、呆然とその光景を眺めていた。

「お前を殺したのは、確かに母親だ。だが、この母親とお前を殺した母親とは別の人物だ。」「

「なるほど、そういうことか……。」「

たとえば、実在するあの子と、俺のイメージするあの子が同一人物ではないように。けれど、俺の中の真実は、俺のイメージするあの子が真実でありすべてになっている。そうだった具合で、俺は空想の母さんを真実として、俺の世界の現実にしてしまったのだ。

そして、俺はその空想に取り憑かれ、殺された。

「俺が、母さんを殺したと思ったんだ。母さんも、俺を恨んで死んだんだって。そしたら、それ以外のこと、考えられなくなって……。すごい形相の母さんに、死ねって言われて……。」

「そんなことお母さん言わないよ。ユエちゃんのやりたいことがあって家を出たんなら、好きなようにやってよかったんだよ。ユエちゃん、ユエちゃんの道を行けばよかったんだよ。お母さんも、お母さんの道を行くから、ユエちゃんは……。ユエちゃんには幸せになつて欲しかったんだよ。」

「じゃあ、どうして俺を残して死んだんだ！俺、母さんのこと……。」

頬を涙が伝った。だが、果たしてコレは生前涙と呼んでいたものなのかは解らなかった。それでも、俺は確かに泣いているんだろう。「解ったから、解ったから……。ユエちゃん、ごめんね。ごめんね。もう、耐えられなかったんだよ。お母さん弱かったね。ごめんね、ユエちゃん……。」

俺は、母さんを裏切ってしまった。そんな罪悪感でいっぱいになった。存在意義なんてもう意味が無い。もう、存在していないのだから。

「お母さんね、何にもできなかつたんだよ。ユエちゃんが、お母さんの亡霊に殺されるの、止めてあげられなかつたんだよ。ずっと、ずっとそばに居たのに。とめて、あげられなかつたんだよ……。」

嗚呼。自分の分身の亡霊に、愛しのわが子をこのような形で殺された、その亡骸を目の前に吊るし上げられるなんて。どれほど辛いものなのか。想像に耐えない。せめて俺が気丈に振舞って、母さんその苦しみから解放してあげなくてはいけない。

だが、さすがの俺も自分の変わり果てた肉体を前にすると、そんな強気もくじけてしまった。自分の身体に戻ろうとすると、断末魔の苦しみが俺を襲った。まだ、身体は生きている。だが、そこから降ろさない限り、首が絞まってまもなく死ぬだろう。見る見るうちに、俺の身体はかつての俺の面影を失って行く。紫色のカエルのような、それはもう、酷い醜態だ……。

母さんが、肩を震わせて泣いている。

「大丈夫だから、もう、いいよ。俺は、コレで幸せなんだ。」

実際、そんなものは口からでまかせだった。こんな母さん、見たくなかった。どうせこんな死に方するくらいなら、最期まで生き抜いて。「お帰りなさい」の一つでも言ってもらいたかったのに。俺は何十年という長い記憶のアルバムを開いて、あの時はこうだった、この時こんなことがあって……。そんなふうに、笑い話を沢山あげたかった。なのに……。

なるほど、コレが、地獄なのか……。

やがて、俺の身体は、死んだ。

その瞬間、まるで火がついたかのように。母さんのけたたましい泣き声が、薄暗い部屋に響き渡った。



## 四章 ポジティブシンキング

### 四章 ポジティブシンキング

ユエの身体が降ろされたのは、それから3日後のことだった。学校に姿を見せないことを心配して、カオルというユエのクラスメイトの男子が様子を見に来たのだった。

俺たちは、その様をずっと眺めていた。ユエの身体は、見れたものではなかったが。やっと供養されると解って、幾分かほつとした。だが、当のユエにはそれも恐怖でしかなかったようだ。身体が焼かれて無くなるのは、酷く辛いことだろう……。

それよりも、

「これからどうしろというのだ。」

「それは俺の台詞だよ。てっきり、お迎えか何か来てくれると思ったのに」

そういえば、こんなことも誰かが言っていた。人には定められた寿命があつて、その寿命を全うするまでは、自殺してもこの世に居なくてはいけないとか。あるいはこの世に未練があるからあの世にいけないとか。

何が本当なのか、見当もつかない。

「なんだ、お前らしくないじゃないか。何が本当かなんて、お前が信じたら、それが本当になるんじゃないか？」

「いや、そりゃそうだけどさ。それは俺の中での話であつて……。

「俺の中の？ふふん、内と外を隔てる皮膚がどこにあるというんだ？お前はもはや零体に過ぎないんだぞ？」

まあ、確かに。ここにミスター・クロックマンが居る時点で、す

でに内と外の区別が無い世界であることが解る。

「まったく、何のための俺様だと思ってるんだ？お前の幻想を現実にするための存在ではなかったか！」

「そうだけど・・・。」

そして、ミスター・クロツクマンは俺の中にあるしこりを敏感に察知していた。そして、その内容も、おそらく全部お見通しなんだろう。

「お前のことは、嫌いではない。ユエはそういうものへの耐性がある。いや、無いといったほうが正しいのか？たとえば、そのぶっ飛んだSF映画さながらの願望とか・・・。」

こうして具現化したことで、ミスター・クロツクマンを俺以外の誰かとして認識しかけていたが。なるほど俺の分身だ。なぜミスター・クロツクマンが俺の妄想を知っているかという点、そもそも俺にそんな幻想を抱かせるような存在はミスター・クロツクマンしか居ないからであって・・・。

「俺様はユエが認めた真実を、真実としてその世界で実現し行使する存在。お分かりかな？」

「解ってるさ。こうしていても埒が明かない。どうせやることもないし、少しでも可能性があるのなら、やらないよりもやったほうがいい。幸い、ミスター・クロツクマンのおかげで不可能ではないようだし。」

「後悔先に立たず」。そう、後悔しても、過去には戻れない。けれど、それが俺の思い残したものである以上、過去に戻ってやり直さなくてはいけない。願わくは、俺と母さんと父さん。俺の家族が幸せに微笑んでいる世界になるように。

「解っているだろうが、この世界のお前はすでに死んでいる。たとえ過去に戻ってお前が望む幸せな未来とやらにたどり着いたとしても、干渉した事でそこから枝分かれした先の未来の話であって、お前とはまったく関係の無いお前の未来だ。それを忘れるな。」

「ユエちゃん、あなたの好きなようにやるんだよ。それで貴方が幸せになれたら、お母さんも幸せだからね。」

そう言っつて、母親はユエを抱き寄せた。

「母さんに、ステキな世界を見せてあげるから。待ってて・・・、  
母さん。」

## 五章 タイムスリップ

### 五章 タイムスリップ

俺は、ミスター・クロックマンにほとんど乱暴にその体内に取り込まれた。なんていうんだろう？うん、取り込まれた。マントの中に引きずり込まれるような、そんな感じで。そして、気がつくと俺たちは真っ暗なところに居る。

「ここどこさ？狭いよ、もっと離れて！」

「押すな、そもそもお前には肉体がないだろうが！」

そういえば、そうだ。思い出したとたんに、その空間が広く感じた。いや、ただ単に、色んなものを通り抜けられる身体だからなんだろう。体の中に、いいしれない異物感を感じる。なんていうか、これは普通通り抜けられるようなものではないっていう固定概念がそのまま適応されているだけであって。それを考えたら、俺は俺じゃない何かにでもなれるということなんじゃないか？

「何してる？」

「いや、なんとなく。」

俺はなんとなく、自分が巨大な蜘蛛であると認識してみたら、どうやら本当にそんな形になったらしかった。ついでに、蜘蛛の目玉は8個あると聞く。ここが真っ暗でなければ、いったいどんな風に見えるのだろう？

ガラッ！

不意に、闇が開いた。

そこには、なんと俺が居た。しかも、紫色の穴の開いたトランクスいっちょよ。

「これって、過去？」

「そうさ。お前が未練を残した過去の一つだ。」

「俺たちのこと、見えないの？」

「お前に本物の霊感が無ければ、見えないはずだ。」

「ふーん。」

俺は押入れから這い出して、部屋の中を見渡した。

「うん、普通に俺の部屋だ。」

「まだそんなかつこしてんのか？」

「いいじゃないか。せつかくなんだから。」

背後で「ああそうですか。」というやつつけな返事が聞こえたが、パソコン机の上においてあるデジタル時計は、もう少しで日付が変わるところだった。二月の二十六日。そうか、母さんの誕生日だ。

この部屋の主は、ぼんやりパソコンでゲームをしていた。時折だるそうにケータイを見つめる。そして、カレンダーを見ては、ため息をついていた。

「電話！」

「あ？」

「電話だよ！母さんに、電話するんだ！」

せめて、誕生日に何か一言あつてもいいじゃないか。そしたら、もしかしたら思いとどまってくれたんじゃないか。そんなことを思っていた。

「なら、憑依すればいい。お前の身体だ。簡単に入れるだろう。」

「そんなことできるの？」

「かつての身体よりは動かしづらいだろうが、仕方ないだろうよ。」

ぼんと背中を押されると、俺は俺の身体に飛びこんだ。

不意にずしつと身体の重みを感じた。空気の冷たさも、水槽のモーター音も聞こえてきた。

けれど、それと同時に当時の俺の記憶も全部戻ってきた。

「そうだ、俺、なんか親に電話するの恥ずかしかったんだよな」



「今度いつ帰ってくるの？」

「うん、3月くらいかな。」

「待ってるね。」

「うん。お母さんの煮物食べたい。」

「いっぱい作っておくよ。イカの塩辛も作ろうか？」

「うん。いっぱいね。」

「はいはい。」

いつもの、ちょっとそっけない会話。たいしたことを話すわけではない。けど、それがすごく大切な事に思えた。

電話を切るのが、忍びなくて。

できたら、ずっと……。

## 第六章 帰省

### 第六章 帰省

三月、俺は実家に帰った。

母さんは、相変わらずの様子で。俺を盛大なハグとキッスで出迎えた。やっぱり、家のおいはほっとする。来た人は、口をそろえて「木のいいにおいがする」という。このにおいが、やっと俺を旅の緊張から解放させてくれた。

「いつまで居るの？」

母さんが尋ねてくる。「長く居ればいいじゃない？」

「そうだな。3泊くらいしていいこうかな。」

「もつと居ればいいのに。もう、帰ってきなさい。」

「うん、お金たまったら帰ってくるよ。」

母さんは、事あるごとに「帰ってきなさい」と言う。けれど、俺はまだ、帰れない。何も収穫が無いのに、手ぶらで帰るなんて。貴重な時間を、こんなにも無駄にしているのに……。

「お金なんていいから、かえっておいで。」

そついう母さんの顔を見ると、心が揺らいだ。

夕ご飯は豪華だった。男の一人暮らしで食卓に並ぶものなんて、限られている。それを思えば、かつて普通のように食べていた夕ご飯が、ご馳走に見えた。

「ユエちゃん、おかわりは？」

「まだ食べるのか？」

俺は母さんに空の茶碗を手渡した。

「いつもユエちゃんはこのお茶碗で2膳食べるのよねーッ！」

「のよねーッ！」



「ユエが好きなもの、母さんいっぱい作ってくれたぞ。まったく、いいなあ、この人は！」

父さんが、まるで母さんに愛されている俺をうらやむかのように、そんなことを言う。

「やーい、やーい。嫌われ者。」

ふざけてはいるものの、それは紛れも無い事実だった。母さんは、俺が生まれてこなかったら今頃この人と離婚していただろう。

「お母さんお父さんの事嫌 い！」

追い討ちをかけるように、母さんもそんなことを言う。まあ、腰が悪いし、もう60過ぎの老体だから、働き口が無いことはしょうがないのかもしれない。しょうがないのかもしれないけれど、さすがにそれはよいことではない。

母さんがおかしくなってしまったのも、この人のせいなんだろう。母さんに暴力を振るうかつての父を、記憶の端っこでまだ覚えている。

それでも、母さんは、父さんを見捨てなかった。それは、「こんなお父さんでも、ユエにとってはたった一人のお父さんなんだものね。」ということからだ。急に離婚したいと言い出した時も、「別れたら、ユエちゃんの帰る場所が無くなっちゃうものね。」と言って、断念した。

そんなシリアスな家庭事情を覆い隠すかのように、家族の中でおかしな道化が繰り広げられている。俺が居ない間、この2人はどんな生活をしているのか。想像すると少し怖かった。俺にとってはなんら変わらないこの食卓も、俺が居なくなったらどんなものになっているかわからない。少なくとも、こんな手の込んだ煮物なんて並ばないんだろう。

それでも確かに、この人はたった一人の父親なんだ。

不意に目が覚めると、寒かった。隣には、母さんの横顔がある。

たしか、昔のように川の字になって眠ったはずだった。だが、母

さんはいつの間にか俺の布団に入ってきて、無意識のうちに俺の布団を奪ってしまったらしかった。仕方ないので、母さんの布団から掛け布団を引っ張ってきて、定位置にもどって眠る事にした。

母さんのおいがした。

翌朝、気がつけばすでに母さんは居なかった。もう、仕事に行ったらしい。仕事と言っても、家は自営業。宅配便の取次ぎとか、クリーニングの取次ぎとか、そんなことをやっている小売店だ。元は父さんのおじいさんから続いた荒物屋だったが、父さんの代でそれは終わり、いまや母さんがなんとか切り盛りしている。そんな状態だった。

台所のふちに、危なっかしくお皿が一枚のっている。俺の朝ごはんは、たいていここにあるんだ。いつも、食べないで学校に行ってたから。そのメニューは、たいてい海苔巻きかサンドイッチだった。その日の朝ごはんは、なんかいろいろ挟まってる豪華なサンドイッチだった。

父さんは、相変わらずごろごろ寝て暮らしている。たまに「イテテ、」と腰をさすりながら起きてきては、そこらへんのものを食べて、テレビを見ながらまたごろごろする。

仕方の無い、父さんだ。

昼は、いつかのようにホットケーキを作って店に持っていった。裏で、母さんがテレビを見ながら店番をしている。バターと砂糖の甘い匂いをかぎつけたのか、戸を開けるとすでにそこで待ての姿勢をとっていた。

「気が利かないわねえ、コーヒーとかなんか普通つけるでしょう？」

「は？それが物を頼む態度か？」

「うそうそ、ありがとー！ユエちゃん大好きッ！」

「母さんが好きなのは俺じゃなくてこのホットケーキなんだろう？」

「ユエちゃんも、大好きッ！」

はいはい、だ。

それと交換に、母さんがまた隣の店から買ってきた菓子パンをくれた。

「ほら、あのクリーム入ってるやつ、好きだったでしょ？」

「うん、ありがとーッ！」

コーヒーを入れる。だが、ポットのお湯が冷めているし、もうほとんど無くなっていた。仕方が無いのでヤカンに湯をはって火にかけた。

たった壁一枚。壁一枚下で、母さんはどんな顔してホットケーキを食べているんだろう。

コーヒーを持って行くと、それと交換に白いお皿が返ってきた。

「もう食いおわってんじゃん！」

「ああいうのは温かいうちにたべなくちゃおいしくないでしょう？」

「まあ、そうだけど。」

「ご馳走様。ムチュツ！」

「グロテスクなタコ」のような唇で待てしながら目を瞑る母の鼻の先で、ぴしゃりと戸が閉まった。いや、閉めた。まったく、バカばっか！

夜になった。店を閉める音がして、やがて母さんが二階に上がってきた。

「今日はカレーにしよう。」

そう言うのと、そそくさと調理を始めた。

コタツの上には、昨日の残りも含め、またしてもご馳走が並んだ。二膳目は白いご飯で、イカの塩辛を食べた。

母さんの塩辛は、安心して食べられる。母さん几帳面だから、寄生虫など絶対に居ない。そんな塩辛に慣れていたので、一人暮らしを始めてから、皮のついた既製品の塩辛の残り汁をご飯にかけた時、

ぶつぶつとした、原型は残っていないものの明らかにこれは寄生虫の死骸であろうと思われる白い小さな塊を見てしまった時、凄まじい衝撃を受けたのだった。

「ユエちゃん、おいしい?」

「うん。」

そうか、もう二日目の夜か。落ち着いて家族で食べれる夕ご飯は、今晚で終わりか。そう思うと、なんだか寂しくなった。次は、夏休みとか、お盆とか。そんなものだろう。

その日も、やっぱり川の字になって寝て、やっぱり母さんが俺の布団に入ってきて、やっぱり気づけば俺だけ寒かった。

こんな年になって、こうやって寝るなんて。恥ずかしい話だが、たまにはコレもいいだろう。俺が母さん以外の女性とこうして眠る姿なんて、全然想像がつかない。想像がつかないが、母さんに孫を見せてあげられたら、それは幸せな事だと思う。きつと、母さんは喜んで、孫を抱っこするんだろう。

朝になると、やっぱり母さんはもう居なかった。

身支度を済ませて、店の裏のソファに座る。なんか、ここにいたい気分なんだ。とりあえず、一晩眠ったであろう昨夜のカレーを二人前持ってきた。今度はちゃんとコーヒーク付きだぞ。

「あら、気が利くじゃない?」

「まーね!」

母さんが店先から戻ってきて、ソファに落ち着いた。早速カレーをほおばる。

静かな空間に、カレーのにおいが立ち込めて、テレビがせわしなくしゃべったり笑ったりしている。要するに、食っているときは静かなんだ。

「ご馳走様！あとかたづけもしてくれるの？ありがとう！」

「え、そんなこと言ってるじゃない」

「気が利かないわねえ。」

俺はすくすくもって持ってきたものをお盆に載せて台所に持ち帰ってきた。

そういえば、「跡形付け」と称して、母さんの首にキスマークを付ける遊びをしていたことがあった。あ、もちろん小さい頃のお話だ。今やったら、しゃれにならないだろう？

洗い物を終えた頃、「ユエちゃん！」と、遠くから呼ばれた。

「何？」

「お店番してなくちゃいけないから、夕ご飯の買い物してきてちょうだい？今夜はお刺身にしましよ。」

たいてい、手っ取り早く済ませるならお刺身にする。この春先は、カツオもいいかもしれない。マグロより味があつて俺は好きだ。

通りには、まだ雪が残っていた。泥にまみれた汚い雪だが。それでも、ずいぶん会っていないかつた旧友に再会したかのような気分だ。ほとんど何も変わっていない通りを歩きながら、幼い頃の自分に思いを馳せた。

なじみのスーパーにつくと、もうイチゴが並んでいた。と言つても、イチゴなんか冬でも並んでいるのだが。なんとなく、春つて感じがするじゃないか。誰か知人に会わないだろうかと期待したものの、結局誰にもあわなかった。そうして、買い物は難なく終了した。

夜、最期の晚餐。そんな気持で一口一口味わつた。母さんの背後に見える紅いキャリーバックと、すっかり綺麗にクリーニングされたクマのぬいぐるみが余計にせきたてる。もう、帰らなくてはいけないのだと。

カツオをじつと眺めながら食べる俺に、母さんは言った。

「虫いないから大丈夫だよ！」

そう、俺は背中のおうを買ってきたから。いや、そうじゃなくて  
さ。。。。

結局、最後までそんな家なんだ。

## 七章 五月

### 七章 五月

五月の二週目。母の日。

「もしもし」

「あら、ユエちゃん。どうしたの？」

「どうしたの？って。まったく……。」「  
解っているくせに。」

「元気にしてる？」

「元気だよ。そっちは変わらず？」

「うん、いつもどおり、何にも変わってないよ。母の日だからって、  
電話かけてくれたの？ありがとう！」

「べっつに！」

嗚呼、我ながら、素直じゃない。

「帰っておいで。」

「ああ、お盆には帰れると思うよ。」

「そっじゃなくて。こっちで暮らさない。」

「うん、お金たまったら、帰るよ。俺の家、作るんだ。それまで待  
ってて。」

「ここです、一緒に暮らしたくないの？」

「けど……。」

「ここはユエちゃんのお家だよ。かえっておいで。お部屋もきれい  
にしてあるよ。何にも、いじってない。そのままだよ。」

「うん。けど……。なに、お金なんて直ぐたまるぞ。二、三年の  
辛抱じゃん。」

「……。そっか。」

母さんの、寂しげな顔が目には浮かぶと、いたたまれない。

「お盆にまた帰るし。また電話するよ。」

「うん、元気でね」

「うん。」

目標金額は三百万。

二、三年。そんなんで、まとまったお金が貯まるとは、到底思えなかった。けれど、なんにせよ、それくらいは居ようと思っていた。そしたら、帰ろうと思っていた。

「……、もしもし？」

その、月の終わりのことだった。

サークルが終わって、ケータイを見てみると、家から電話が立て続けに4件入っていた。かけなおしてみると、父さんが出て。

「ユエ、ユエ、ごめん、ごめん……。お母さんが……。お母さんが……。」

母さんが、今朝、自殺した。

「どうして、ねえ、どうして!」

「まあ、まず落ち着けて。」

「俺、実家帰ったし。電話もしたし。かあさん喜んでくれてただろ?それなのに、どうして……。」



「言っちゃ悪いが、こうなる運命だったのかもしれない。お前がどうあがこうと、今日お前の母さんは死ぬって決まって……」  
「そんなの信じない。信じるものか！そんなの、あんまりじゃないか。かあさん、あんなに頑張ってたのに。こんなの……」

ユエは、過去の自分の体から抜け出して、道端にうずくまって泣いた。直ぐそこで、もう一人のユエが、ケータイを耳に当てたまま、呆然と立ち尽くしている。カオルという友達が、ユエを支えていて、かろうじてユエはそこに立っていた。誰も居なかったら、このユエも、今俺の前でうずくまって泣きわめいている未来のユエのように取り乱していたのかもしれない。いや、泣きはしなかっただろう。ただ、呆然と、そこにうずくまって現実という苦いコーヒーに、どばどばと砂糖を入れていたんだろう。

「ミスター・クロックマン。お願いがある。」

「なんだ？」

「もういつかい、過去に行きたい。今度はもつと前。俺が進路を決定するその瞬間に！」

「……、いいのか？どんな未来になるか俺にも想像できないぞ。

ましてや、」

「いいから……お願い。」

そして、俺は再びミスター・クロックマンの体内に引きずり込まれた。

## 八章 幸せ

### 八章 幸せ

モーター音のしない部屋。水槽が、無いんだ。  
そこに、俺は居た。

ベッドの上に寝転がって、ぼんやり天井を眺めている。そして今にも家族と一緒に居られる時間の貴重さを知りながら、あえてトウキョウに出るといふ決断を下そうとしていた。

俺は段ボール箱から飛び出して、俺の身体に憑依した。

決めた。実家に残ろう！

夕ご飯は、焼き鮭だった。

「まったく、どうなる子なんだか。」

母さんがため息混じりに俺をにらんだ。

「うん、俺どこにも行かない。就職するよ。」

思わぬ答えに、母さんはしばらくぼかんとして、そして怪訝な顔をした。

「どこに？」

「うーん、さあ。そういう機関でさがせるっしょ？いいのあったらそこに勤めるよ。」

「お前はよくても、向こうにだって選ぶ権利があるんだぞ？」

父さんが言うと、なんか、重たい。

「それに、今の時代大学出たって就職難しいんだから。」

「だったらバイトすりゃあいいじゃない。父さんが以前勤めてたところでもいいし。そこらへんのスーパでもいいしさ。」

「あんたが決めたんならそれでいいけど……。ほんとにそれでいいの？」  
「うん！」

学校を卒業した後しばらく休んで、早速仕事探しをした。

なんていうんだろう。たとえるなら、ギルドっていうんだろうか。そこに行くと、いろんな仕事を紹介してくれる。そんなゲームみたいな場所が、現実に存在しているんだ。やっぱり、そこは現実で、なんていうか堅苦しい場所なだけけれど。

朝っぱらからすごい人だった。今、この辺では就職がとてつもなく困難で、人口と就職口が足りあていならしい。些細なバイトですら人が詰め掛けて、面接で順位を決められ上から何人って採用される。残りは問答無用でさよならバイバイもう来るな、だ。

「そうですね、まだ若いから。採ってもらえる可能性は高いですよ。」

相談口のお姉さんとおばさんの中間くらいの女性がそう言ってくれた。なるほど、俺には若さという武器がある。それでも、あと五年六年もすれば、いまよりもっと確立が下がるのだとか。

そんなこといわれても、危機感無いし。

まさかこんなに早く面接の日取りとか決められるとは思っても居なかった。印刷した紙をその女性に渡すと、そっこう電話かけて日取りを決めてしまった。こちらの心の準備なんて、お構い無しだ！

「どうだった？」

家に帰ると母さんがそう聞いてきた。

「うん、近くのスーパーでバイト募集してたからそこ行こうかなって。フルタイムで入ると、なんか待遇よくしてくれるみたいだし。」

「受かるといいわね！」

「そうだねー。」

このまま一生ここで暮らすんだろうか。母さんと、父さんの面倒を見て。最後は一人？そんなの嫌だ。嫁もらって新しい家庭を作っ  
て……。けど、俺はずっと働いて働いて働いて……。

「幸せって、なんなんだろうな？」

思わずため息を吐いた。

「何にも無いのが一番幸せなんだよ。」

「え、母さん！」

「ユエちゃんがここに居てくれて、お母さん幸せだよ！六十キロ！  
母さんの体重は、残念ながら本当に六十キロ以上ある。それでい  
て俺よりも身長が小さいとはこれいかに？女性は出るところが出る  
から……。それにしても、重い。できたら、いや即行ここからど  
いてくれ！」

母さんをしっし！と追い払って、やっと俺は一人になった。

何も無いなんて、つまらないだけじゃないか。なにか、なにか刺  
激が欲しい。

かくして、おれはスーパーのフルタイムのバイトを始めた。朝か  
ら晩までレジを打つ。最悪誰かの変わりにもっと長い時間いなくち  
やいけないこともあったけれど、家は家計的にいくらか余裕が出て  
きた。

たとえば、夕ご飯の後にイチゴが出てきたり。

「ユエちゃんお仕事のほうは順調？」

「ん？ああ、順調って言うか、単純作業の繰り返しだからね。ずっ

と立ちっぱでつかれるけどさ。」

「お疲れ様！それに比べてこの人は、」

「お父さんはもう退陣。」

「なんだそれ！友達のお父さんなんてお前より年上だぞ？」

「お姉さん達だつてまだはたらいてるんでしょ？」

そう言つて、父さんを困らせる。母さんは、どこかエスッ気があるらしかった。

「お風呂沸いたから入りなさい」

「はい。」

なんでもない、日常。

なんでもない、日常。

コレが、幸せ？

その夜、俺は夢を見た。母さんが死ぬ夢だった。それはどこかすぐリアルで、俺はその世界の現実の中で、どうすることもできないまま。ただ、ひたすらその顔を見下ろしているんだ。

紫色の、カエルのような。けれど、とても安らかな、どうしようもなくやさしい母さんの顔を……。

ぶっちゅ……っばっ！

「う……、うえええ……。かあさん、」

「おはよう、ユエちゃん。朝だよ起きてー！」

ぶっちゅ！ちゅ、ちゅ、ちゅばっ！

「起きてるよ、気持悪いなー！」

「いいじゃない？減るものじゃないんだし。」

「なんか生気を吸い取られてる気分だよ！思いつきり減ってる気分

だよ！」

「はいはい、もう仕事遅れちゃうよー？」

いつもの、朝だった。

「嗚呼、唾液が付着してる。皮膚が溶けそうだ！」

「いいじゃない、うらやましい。」

「黙れハゲ！」

にやにやしながらこっちを見ていた父さんに罵声を浴びせて流しで顔を念入りに洗う。顔を洗いながら不意に今朝の夢を思い出した。

何も無い幸せ。母さんがこうして生きている。何気ない、このくだらない日常が明日も明後日もつづく。確かに、幸せな事だ・・・。

俺は、家族三人で幸せになりたい。それが夢だっというじゃないか。ねがわくは、新しい家庭とかも持ちたい。孫を見せてあげたいじゃないか。それから・・・。うん、あげていくときりがない。けれど、そうか。要するに、コレが普通の幸せっという奴なんだろうな。

そのまま、何も変わらず二年が経過した。

その頃になると、母さんは妙に外に出たがっていた。

母さんの異常は俺が小学校の頃からだ。いや、本当はもっと昔からそうだったのかもしれないけれど、少なくとも俺が小学校四年生の頃、精神科の病院に入院した。父さんのなまけと暴力で、ついに幻覚や幻聴をおこし、被害妄想が膨らみ、手がつけられなくなってしまったんだ。

あの時の恐怖は、いいしれないものがあつた。

それから父さんは頭を冷やして働くようになったのだが、結局いくらか続かないままこしを悪くしてこの様だ。母さんは、今も薬を飲んでいる。

湖に散歩に行ったり、農場に行ったり。公園にも言った。ただ、

散歩するだけなのだが。一人で歩いている姿はさながら夢遊病者のようにも見える。どこか、ぼんやりと、小さな子供を見かけては愛おしそうに目で追いかけていた。

その日は、五月の終わりの日曜日だった。

仕事は無いから、のんびりできる。母さんも、店はお休みだし。今頃寝てるんだろう。そう思った。

トイレに起きると、寝室に母さんは居なかった。居間には今日の新聞があつて、朝ごはんが台所の角においてある。

ちよつと豪華なサンドイッチと、コーヒード。

トイレにも居ない。風呂場にもいなかった。

「母さん？」

店に行ってみるが、シンと静まり返っている。外に出たのだろうか？

そして、俺は見てしまった。物陰の向こうに倒れている母さんを・  
・。

「どうして……。」

ああ、なんて声をかけたらいいんだろう。

ユエは、その様をじっと見ていた。

「母さん、母さん！おきて！お母さん！」

もう一人のユエが、母親をゆすり起こそうとする。だが、起きない。クビには黄色いビニール紐が絡み付いていて、くつきりとおぞましい痕を残していた。母親の顔は、まるで紫のカエルのようにむくれて、目がとび出していた。その口からは、紫色の舌が飛び出し

て。不自然に足を折り曲げてそこに倒れている。

「父さん、父さん！母さんが、母さんが死んじゃう！」

父親が駆けつけたときには、ユエは救急車を呼んでいた。電話の指示に従って、何度も何度も心臓マッサージと人工呼吸を繰り返す。げえッ！

母親の肺にたまっていた空気が抜ける音。息を吹き返したと思っただのに、それっきり呼吸は再会されない。

「母さん、母さん！いやだ、こんなの嫌だ！母さん、

母さんッ・・・！」



## 九章 トオリモノ

### 九章 トオリモノ

救急車の中で繰り返される心臓マッサージ。母さんの顔は肌色になつた。それでも、心臓も、呼吸も、再会されなかつた。

父さんは警察に連れて行かれて、いろいろ事情聴取された。その間、ユエは母さんに連れ添っていた。

搬入から約一時間後、母さんの死亡が言い渡された。

「嫌だッ、いやだ！母さん、母さん、母さん！」

騒がしい院内。警察。父さんを攻め立てる親戚のおじさん。霊安室に運ばれる母さん。

その中で、ユエはただ一人泣きくれて。その小さな背中を、ユエがじっと立ち尽くしたまま眺めていた。

「ユエ、」

「幸せって、」

「……。」

「幸せって、なんなんだろうね？」

ユエが、冷たくなっていく母親にすがりながら、独り泣きくれるそれを眺めながら、呟いた。それは恐ろしく冷たい響きを伴い、たった二人しか居ないこの空間に虚しく消えた。

「お前の母さんは、おそらく……、」

「解ってるよ。・・・、解ってるさ。」

「お前を連れて行けるのは、お前の世界の過去だけだ。その世界からは、どうあがこうと出ることはいできない。」

ユエは、今までためた貯金すべて出して、墓を建てた。そこに、母親が納まると、その夜一通の手紙をしたためた。

翌朝、父親は目の当たりにする。つい先日妻が死んだあの場所で、今度は自分の娘がぶら下がっている光景を・・・。

ユエは自らの死体を仰ぎ見る。その隣にはもう一人のユエが。

ユエの遺言どおり、父親は母親の次にユエを墓に収めた。

葬儀が終わわり、やっとほとぼりが冷めると。父親もまた、そこにぶら下がった。

その様子を、二人のユエは。ただ、あきらめ顔で眺めていた。

## 十話 エピローグ

十話 エピローグ

クロス

二つの線が交差する その一点を過ぎ去れば

クロス

もう二度と 交わることは許されないのだろうか

ユエ、ユエ。

彼女は俺の、なんだったんだろう？

友達？親友？彼女？そのどれにも属さない。果たして、俺は彼女のことを好きだったのだろうか……。もし、彼女が死ななかつたら、俺は彼女の事をこんなにも考えていたのだろうか。

カオルは、死んだ事によってユエを初めて、コレまでにないほど意識している自分に戸惑っていた。きつと、彼女が死ななかつたら、ずっと今までどおりの毎日が淡々と続いて行くだけだったんだろう。近づくことも、離れることも無く。ただ、えんえんと続く平行線のような、そんな毎日が。

果たして、それは幸せと言えるのだろうか。

きつと、俺は彼女のが好きだった。ただ、その気持ちに気がつか  
なかつただけだとしたら。

大学を出たら、軌跡でもない限り。あるいは何か必然的な力が働か  
ない限りは、もう顔を合わせる事もなかつただろうし、ユエの近状  
の様子を乗せた風の噂だつて俺のところにはそよとも吹かなかつた  
んだろう。それをたまたま、ユエが結婚したとか、そんな噂を耳に  
したとして。俺はただ、ふうんと聞き流すような世界があつたとす  
るなら、今の世界とどちらが幸せだつたのだろう。

彼女が居ても彼女を絵画の背景の一部のようにしか捕らえられない  
世界と、彼女への愛に気づけても当の彼女が永遠に居ない世界と。  
理性は無論命が失われた世界を否定する。それとは裏腹に、カオル  
の中でその秤はゆらゆらと定まらず。

俺は、ユエのことが好きだった。

そう認識することで、どこかほっとする自信を、カオルはおぞま  
しく思うのだった。

おそらく、彼女への思いに気がつかなければ、こんな喪失感も、  
こんなわけも解らない戸惑いも、言い知れない悲しみも、知ること  
は無かつたんだろう。

まるで、ユエが死んだことで、自身が初めて人間になれたような  
そんな不可思議な感覚に囚われている。

今日も、カオルはユエの部屋の前で足を止める



## 十話 エピローグ（後書き）

ハッピーエンドにするつもりが、凄まじくバッドエンドになってしまいました（滝汗）

つたない文章ではございましたが、ここまでお付き合いいただきほんとうにありがとうございました！！

もし万が一気が向いた時、たまたま荒野蛮の更新情報が貴方のデスクトップ上に出現していたらでかまいません。

次の物語でまたお会いできたらうれしいです（＾　＾）ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4020m/>

---

トオリモノ

2010年12月28日23時40分発行